

Thinking and enjoying cultural heritage.

# 文化遺産の世界

The World of Cultural Heritage

2006

Vol. 22

September

November

特集 文化遺産マネジメントの時代へ

Into the "Age of Cultural Heritage Management":  
Current trends in the West



# ITALIA

## イタリア・オルチャ渓谷の 文化的景観とその活用

The Cultural Landscape of Val d'Orcia and its Use

パオラ・ファリーニ  
Paola FALINI

翻訳：秋枝 ユミ イザベル  
Translation：  
Yumi Isabelle AKIEDA

### Abstract

Val d'Orcia, comprising five municipalities in the south of Siena Province, has a surface of 61.000 ha of mostly cultivated, forest and natural lands. Characterized by particular natural features and layers of historic, urban, cultural and rural elements dating back to the early Renaissance period, it was isolated for 400 years. At the end of the 1980's, the municipalities decided to combine conservation and development with enhancement of their environmental, cultural and landscape heritage. Aims have been to develop tourism respecting the integrity of the environment, landscape, culture and local traditions; to reconvert and enhance agriculture and by-products, with a policy for the recognition of labels, supporting and promoting certified quality; protection and development of small companies, trade and crafts industry with special reference to traditional and artistic activities, and to strengthen services of reception and stay. Inscription on the World Heritage List in 2004 confirmed this political will of active conservation. Testimony of this strategy shared by the whole population is the Management Plan, made to govern and control the future steps of development.

### はじめに

2004年、オルチャ渓谷地域は、二つの価値によりユネスコの世界遺産リストに登録された。その第一は、この景観が「ルネサンス前の景観を再編成した優れた例であって、“善政・よき管理運営”の理想と、この理想を育てた美的探究を表している」という点である。その第二は、この景観が「シエナ派の画家によって称えられた」形態美の例とされる点である。この形態美は、「後の景観思想の発展に深く影響を与える理想像となった」とされている。

この登録は、ユネスコがあるひとつの文化的計画の実効性を認めたことを示している。1980年代に始まり、イタリアで広く行なわれてきた科学的論議のうえにたって、地方レベルで制定された法令に支えられ、5つの自治体が協力して一つの自然文化公園を設立し、現存する資源を保存しその持続的開発を推進するための統一政策を作成するに至ったのである。



1 オルチャ渓谷。アンブロジオ・ロレンツェッティによるフレスコ画『善政（部分）』（1337～1339）。シエナ周辺の田園地域がみられ、その特徴的なものがオルチャ渓谷に残っている。

### 善政・よき管理運営の光景

対象となる地域は、シエナ州の南部に位置する5つの自治体、カステイリオン・ドルチャ、モンタルチーノ、ピエンツァ、ラディコファニ、サン・クィキリコ・ドルチャのほぼ全域を含んでいる。これは6.1万ha近くに上る面積であって、主に農業地帯（62.82%）と自然・森林地帯（36%）からなっている。

この景観の主要な特徴は、クレーテ（シエナ地方特有の粘土質土壤）とカランキ（雨裂の連なる荒地）とビアンカネ（白亜の粘土丘）である。この谷を通りローマへ向かうヴィア・フランチジエナ街道を辿った中世の巡礼者たちはこれを“クレーテ・峰々の海”と呼んでいた。これはまた、歴史的絵画図像と多くのシエナ派絵画に描き表されている、“善政・よき管理運営”的景観である。これはすなわち、一方で放牧地帯と耕作地があり、もう一方で複合的耕作地と森林地帯がある、という形状である。いずれも14世紀から15世紀にシエナ地方に導入された折半小作制度に由来している。

この景観のいまひとつの特徴は、人がそこに居住していることであって、多くの村落が渓谷を見下ろすように配置されている。また、村落や城砦化された館があり、教会、修道院、莊園や農家、古い病院や宿場などが、同じく渓谷を見下ろすような位置に多数分布している。

地域全体に分布しているこの多様な遺産建造物群は、シエナ州の地域整備計画によって特別な保護の対象となった。州の地域整備計画は、これらの遺産の組織的な調査を企画し、これを保護するための基本目的を設定したのである。

## 行政区分・地域区分を越えた事業主体

オルチャ渓谷地域の行政を一体化しようという構想は、1980年代の終わり頃から始まった。この地域のために考えられた開発のモデルは、文化的価値・自然的価値を考慮せずに地域の資源を活用しようとする従来の方式とは、異なるものだった。この計画の目指すところは、保存と開発とを結び付け、環境的・文化的・景観的遺産を経済開発活動の中心に正しく価値付けることであった。最初の発議は1988年、五つの自治体の共同文書として発表され、これは1989年シエナ州の企画報告書のなかに採択された。その時から、企画された種々の事業を統一的に調整する必要のあることが明らかになった。このような要請を受けて1996年、一つの自然文化公園を作ることを目的として、シエナ州政府、シエナのアミアータ山共同体、事業体連合、企業連合、個人の代表、の五者よりなるオルチャ渓谷有限会社が設立された。この統一調整機構はまた、行政的・形態的区分と自然地域・農業地域・都市地域の区別をこえた地域行政戦略を立てようという構想に対応するものだった。

## 統一的なプログラム

この統一的プログラムは、トスカーナ地方方法第45/95「自然文化公園、自然保護区、地方自然保護地区に関する基準 (Area naturale protetta di interesse locale ANPIL)」によって実現された。この法律は、“地方自然保護地区”と規定された自然保護地域の形態を定義したものだった。これは自然文化公園についての国の法律の諸原則に反するものではなく、イタリア各地に広く見られる、古来からの暮らしが何世紀にもわたって自然的・環境的価値と不可分に共生している地域において、より柔軟かつ適切に適用し得る環境監視保護モデルを、作ろうとするものであった。地方自治体は条例によって、地域の持続的発展のために関係者相互がとるべき連携の形態と管理の形態を規定する責任を負っている。一つの自然文化公園の建設が始まると、地域行政の制度間にしばしば衝突がおこるが、これはそのような衝突の解消を可能にしている。

オルチャ渓谷地域の五つの自治体は上に述べた地方法によって与えられた機会を好機として、シエナ州とともに1997年、オルチャ渓谷地域保護地区の連合形式による管理に関する合意書に調印した。これに署名したものはこの合意書により、オルチャ渓谷地区の環境保全と社会経済的発展のために定められた、環境、地域の整備、都市計画、農業、工業、手工業、文化、

観光、公的サービス、社会的基盤といった社会的機能と事業を、組織的かつ、あるいは共益的な形で実現することにより、この地域を管理するとされている。特にこの地域の第一回合同会議においては、1997年の合意書に示された諸原則が再び取り上げられ、1999年から2004年にわたる期間においての自然文化公園行政の目標が次のように定められた。

- 1：環境、景観、文化、地域の伝統、周辺地域に十分な配慮をしながら観光を発展させること。種々の施策をとおして観光を促進し、同時に歴史的、芸術的、文化的、宗教的独自性を発見・再発見する。
- 2：農業、牧畜、並びにそれに関連する生産物をあらためて評価しなおし、銘柄を認定する政策をとり、それぞれの基準により認定された高品質の物品の販売を促進、奨励する。
- 3：伝統的・芸術的諸活動のそれぞれの分野に応じた個々の基準により、小企業、商業、手工業の保護育成を行い、外国からの観光客の要望に応えて技術面での革新を行い、品質についての基準を設け、訪問客の受け入れ・滞在のためのサービスを強化する。

自然文化公園の果たす役割については、特に次の八つの分野が明記された。

- ①環境と景観の保全／②地域全体の管理／③都市計画と公共事業／④観光の促進／⑤文化と催し物／⑥特産物の奨励／⑦高齢者のための施策の実行／⑧五つの自治体行政共通のサービスの組織化

前述の計画を2003年から2006年にかけて行なうための新しい計画が、2002年12月準備された。前回の

2・3  
オルチャ渓谷の景観とピエンツァ地域にある農道と農家のたたずまい。  
この渓谷では14世紀から「クレーテ」の景観のなかで耕作が行なわれている。





4・5  
オルチャ渓谷。バニョ・ヴィニヨーニ。有名な温泉浴場と13世紀の村は2004年に修復された。ムリーニ公園は、1998年から2002年にかけて修復作業が完成されている。

ものと違いこれは、自然文化公園を然るべきよき状態に管理する、という性格を持った計画である。そこでは、これまで分野別に扱われてきた活動を、統合した形で実行する事が求められている。そのためこの計画には、都市計画に関わる二つの法規を作る事が考えられた。一つはANPILに関する法規で、これは地域の価値あるものを保存する関係上、公的・私的活動の許される範囲を規定した基準集である。二つ目は、五つの自治体に共通する不動産に関する統一的法規であり、その地域全体に共通する不動産関連の手続きと基準とを示している。

## 地域の再生と大きな変化

自然文化公園というこの実験についてなされた、出費と利益に関する最初の経済的分析によれば、現在までに行なわれた活動からはすでに実質的にプラスの成果のあったことがわかる。過去において急速に崩壊するまま放置されていた地域と農業景観は、その保護が強化され評価が高められた。

修復、再利用など数多くの処置が施された。自然的・歴史景観的価値のある地区や個々の物件が、その価値を認められるようになった。1998年から2002年にかけて行われた、バニョ・ヴィニヨーニにある“ムリーニ（水車）公園”がその例である。

新しい設備やサービスが提供されることによりこの地区の観光の活動は、州の平均値に比べて著しく増大した。交通の便がよく芸術的関心度の高い自治体ではこの上昇は極めて大きく、周辺のごく離れた地区にまでその影響が認められた。この現象は、受け入れ施設数の著しい増加 (+480%) に表れている。これに対して州全体での平均値はプラス156%であった。

さらに景観の質と農業生産物との間にも、強い関係

のあることがわかった。これにより農業は高く評価され、この地域の銘柄のぶどう酒、油、チーズの売上が促進された（この地区的地区内総生産は、1996年から2004年までの間に28%の増加を記録した。これは同じ時期の全国平均の二倍である）。このようにして農業地区の評価の高まりや、これらの地区的いろいろな活動に対する関心の高まりによって、戦後初めて人口の減少をくい止める事ができた。1951年から1991年の間にこの地区的居住人口は実際、半分に減っていたのである。

オルチャ渓谷有限会社の経営経費は、当初自治体と州の公的資金により賄われていたが、経営活動の直接的収益による自己資金調達へと次第に変わって行った（特に観光サービス部門）。このような変化の結果、はじめは一般住民に困惑をもって迎えられていたこの自然文化公園という考え方も、やがて受け入れられ多くの支持を得られるようになったのである。

## 自然+歴史+文化=価値創出

オルチャ渓谷の自然文化公園は、地域経済の発展との関連において、文化的景観を積極的に保存する試みとして、非常に興味深い例といえよう。

これは下から上へと行なわれた計画策定としてユニークな事例である。複数の自治体が合意の上で計画を推進し、自分達のもつ文化的・環境的価値を全体として保護・保存するための発展的モデルへと、協力して進んで行くという形である。民間企業経営の形式を研究し、統一的経営のための法律を立案したところに、上からの発議に受身で対応していく従来の事例との相違を見る事ができる。

この自然文化公園は、地域全体とその自然的・歴史文化的遺産のすべてについて文化的・経済的価値創出を行なおうとする、一つの独自なモデルである。それは、個々のモニュメントや特別に関心の高い個々の地区にのみ向けていた従来の受身で行なう保護を、決定的に越えてたものである。これは、その優れた内容・概念・行動性において、2000年フィレンツェにおいて宣言された欧州景観条約（Convention européenne du paysage）を先取りしたものといえるだろう。

### ●パオラ・ファリーニ

建築家、ローマ大学ラ・サビエンツア建築学部教授、地域計画・都市計画学科教授。ヴェネチア大学卒業。ANCSAイタリア全国歴史都市保存協会など、文化遺産の保存、都市の文化遺産と文化的景観の分野における、イタリアなどの学術機関のメンバー。パリ大学、マドリード・カルロス3世大学など、多くの大学で客員教授として教鞭をとる。アッシジ、マントヴァなど、イタリアの都市・景観・世界遺産に関する都市計画・管理運営文書の作成に携わる。現在は、ローマ市の新しい都市基本計画に携わっている。